

ガッシャーブルム I・II 峰連続登頂

高橋 和 弘 (明治大学体育会山岳部炉辺会)

明治大学山岳部およびOB会(炉辺会)は、1922年に創部以来、内外を問わず意欲的に登山活動を行ってきた。その中で、1954年日本山岳会マナスル登山隊への、大塚博美会員の参加に始まる、ヒマラヤでの活動も、OBを中心に積極的に実践してきた。1970年に植村直己会員が日本山岳会エベレスト登山隊に参加し、日本人初のエベレスト登頂を達成してから、1997年に炉辺会によるマナスル登山(全員登頂)まで、8,000m峰14座のうち10座に当山岳部員やOBが登頂を果たしている。

OBが高所登山で実績を上げる一方、学生の活動はこの20年近く部員不足に悩み、私が2年生時の1993年度当初は、2年生2名のみという危機的状況に陥った。しかし、私が主将になって3年目の1995年には部員も2桁を数えるようになり、学生主体の海外合宿で、インドヒマラヤのガングスタン(6,162m)に登頂でき、部に活気が戻った。その後の数年間で、私はK2(8,611m)、前述のマナスル(8,163m)、リャンカン・カンリ(7,535m)に登頂する機会に恵まれたが、その間「ガングスタンのメンバーを中心に8,000m峰へ」という夢を持ち続けてきた。1999年のリャンカン・カンリ登山に際し、当初の目標であったガンカー・ブンスム登山が延期となり、リャンカン・カンリに変更後も、諸事情により一部日本山岳会員との関係が悪化するに及び、「次は自分の拠り所である明治で、気持ちよく登山隊を組織したい」と考え、数年来暖めてきた考えを実現させる決意をしたのである。

学生時代に共に合宿を行ってきた後輩達も賛同し、登山隊の結成となった。マナスルでの経験を生かして、さらに意欲的な登山を目指し、目標は炉辺会未踏のガッシャーブルム1峰(8,068m)、2峰(8,035m)の全員連続登頂とした。あくまでも登頂を最優先としたので、ルートはいずれももともともよく登られているG2南西稜、G1北面ジャパニーズクローワールルートを採用した。

隊長を務めた私が27歳、最年少隊員は卒業1年目の22歳と、若手で経験の少ない隊員構成となったが、事前の準備山行で、全員連続登頂への自信を深め、ハイポターを雇用せずとも目的達成は可能と考えた。今回は、混雑が予想されたため、早い時期に登山を開始し、自分たちの手でルート工作、荷上げを行うことも今回目指したことである。また、8月中旬までは登頂チャンスはあると予測し、実動45日に対し、予備を30日用意して、シーズン終了ぎりぎりまで粘れる準備をした。折しも明治大学は2001年に創立120周年を迎え、翌2002年は山岳部創部80周年を迎えることから、2002年に計画されているローツェ(8,516m)、アンナプルナ1峰(8,091m)連続登山とあわせ「明治大学山岳部・炉辺会ドリームプロジェクト」の一環として登山隊が承認された。また出発直前には、明治大学創立120周年記念行事の一つとして承認され、出発を迎えた。

我々は5月14日今年最初の登山隊としてパキスタン、イスラマバード入りした。荷物の通関、プリ

ーフィングなどをすませた後、空路スカルドへ移動、遅れてイスラマバード入りした大森薫雄ドクターは、隊員1名と共に陸路でスカルドへ移動し、本隊と合流した。

スカルドでの準備も問題なく終え、5月25日にジープでアスコレへ。翌26日よりBCに向けキャラバンが始まった。BCで75日滞在できる装備、食料を用意したので、ポーターは213人と多人数になった。BCまでは高所が初めての隊員も特に苦しむことなく、6月2日に標高5,100mのBCに到着したが、今年は雪が少なく、道中ずっと好天だったのもキャラバンが順調にいった要因だった。

6月3日に南ガッシュャープルム氷河の偵察を行った後、5日から本格的な登山活動を始めるとした。雪崩の危険が少ないG2から、先に取りかかったが、悪天により出鼻をくじかれ、実際に登山活動が始まったのは8日からであった。

BC上のアイスフォールは、無数に存在するクレバスのため、突破に丸3日を要し、10日ようやくG1西稜末端6,000m地点のC1に到達した。アイスフォール上からC1までは、G1西稜の下部を巻くようにルートをとったが、日が当たると西稜側壁からの雪崩が危険なため、日中の通過は氷河右岸の、イギリス隊によって工作されたルートを通じた。このルートもヒドンクレバスが非常に多く、タイトロープをしても、非常に神経のすり減る部分であった。

6月23日から3日間の停滞の後、26日にG2南西稜に取り付いた。C1からC2(6,500m)までは、イギリス隊と合同で(8割方我々が工作したが)工作した。2日間でC2予定地に到達した後、すぐにC2への荷上げおよびC3(7,400m)へのルート工作に入った。ラッセルは膝下程度、深いところで腰まで潜る所もあり苦労したが、このころは天気が安定し、スムーズに計画が進んだ。しかし7月2日のC3へのルート工作で、C3まであと200mというところで悪天周期に捕まり、全員BCに降りて休養をとった。この時点でまだC3へは届いていないが、工作終了点から近いこと、隊員の調子も良いこと、G1へ移る時期が遅れると、過去の事例から悪天率の増加、氷河の状態悪化により、連続登頂の可能性が低くなることが予想されたので、次のステージで一気にC3へのルート工作、荷上げ、頂上アタックを行うこととした。

BCで2日間休養した後、7月7日にC2ダイレクト入り、8日は高橋・加藤でC3へのルート工作、残り4名で追っかけほっかを行った。この時期になると登山者も増えたが、ヨーロッパのほとんどの登山隊は、我々がルート工作するのを待って行動するという位だったのには、同じ峰に挑む登山者として失望してしまった。9日に吹雪の中C3入りしたが、この日イギリス隊と栃木隊が登頂し、ここへ来て先を越された形になった。しかし「自分たちはあくまでも連続登頂が目標」と、気を取り直し、翌日の好天を待ち、10日午前3時にC3を出発、頂上に向かった。全員好調で、午前6時30分という早い時間に高橋・加藤が頂上に達し、その後8時までの間に全員が登頂、11日に全員BCに帰着した。

BCでは現地スタッフや他隊の祝福を受けたが、われわれは「あくまでも連続登頂して初めて成功、

4. 登山記録

一つだけでは失敗」という気持ちでいたので、休養日も気持ちを切らさないように、ミーティングで何度も確認しあった。

休養、悪天による停滞の後、7月20日からG1に取りかかった。G1は既にチリ、スペイン各隊が登頂していたが、チリ隊クラディオ隊長の滑落死は、友好を深めていただけに非常に残念であった。我々は1日で北面6,400mのC2への偵察を終え、21日に全員でC2荷上げを行った。この時点で直感的に好天周期があと2～3日で崩れる感じがしたので、このステージで一気にC3への偵察、荷上げを終えて、来るべき悪天をBCで迎え、次の好天周期でアタックする作戦に切り替えた。この読みは我ながらびっくりするほどの中した。23日に高橋・加藤・森・谷山で荷上げのため、標高7,100mのC3へ到達すると同時に天気が崩れ、吹雪の中を下降し、翌24日にBC帰着、最後となるはずの休養に入った。この頃より悪天の支配率が高まり、この停滞は8月1日まで続いた。

好天周期を待って、8月2日からアタックステージに入り、4日午前1時40分、C3を出発。しかし出発の頃から雲が湧き始め、上部クーロワールを抜けて7,600mに達する頃には、ホワイトアウトの状態になったので、態勢を立て直すべく、その日のうちにBCまで退いた。登山期間が2ヶ月を超え、疲労が溜まってはしたが、ここまで来ると開き直りと共に、全員が最後まであきらめない覚悟を決めていた。天候の回復を待って8月7日、再度アタックのためC2に入った。この頃になると、季節の変化を感じられるようになった。風がこれまでより冷たく、気圧は高いのに悪天が続き、もう長期の好天は望めなくなってきた。賑わいを見せたBCも閑散とし出し、登山シーズンの終幕を迎えつつあった。

C2で悪天のため4日間の停滞を余儀なくされ、あと1日悪天なら撤退という8月12日、ようやく好天が訪れた。これがラストチャンスとばかりにC3入りしたが、午後になると再び暗雲に閉ざされ、雪が降り始めた。共にアタックを迎えるカザフスタン隊と交流しながら、翌日の好天を祈り続けた。このところの天気の様子から、翌日は晴れても午前中のみと判断し、翌日は午前1時出発に決定、朝のうちに登頂し、午後の早い時間にC3帰幕を目指した。

12日の日没頃から雲が途切れ始め、13日は奇跡的な快晴の中、予定通り午前1時に出発。カザフスタン隊と前後しながら順調に高度を稼ぎ、頂上直下の氷雪壁に3ピッチロープを固定して頂上稜線に抜け出る。そこから約15mで頂上であった。午前7時40分、登山開始より73日目にしてようやくG1に全員登頂を果たした。まさに粘りの末に勝ち取った全隊員連続登頂であった。C3に帰幕する頃には雲が頂上を覆い、C2に着く頃には完全に悪天となっていた。

翌14日、暗雲たれ込める中をBCに帰着、15日に加藤・森・天野の3名によるC1からの荷下げをもって全ての登山活動を終了した。8月17日、77日間に及ぶBC滞在を終えて帰路キャラバンに入り、ゴンドコロ峠～フーシェ経由でスカルドに戻った。ゴンドコロ峠から見るガッシャーブルム連山は、感慨深くも心なしか小さく見えた。スカルド、イスラマバードでは分不相応な歓待を受け、24日に元

気に帰国した。

今回の登山は「全隊員連続登頂」を目指して、最後の最後まで誰一人、気持ちを切らさなかったことが、成功につながった。これだけの長期間、初めて高所登山を行う隊員も最後まで粘れたのは、学生時代に、地味ながらも地に足の着いた合宿に、全力で取り組んできた賜物である。流行や風聞にとらわれず、一見時代遅れとも言える「明治の山登り」が、この成果を生んだのである。自画自賛になるが、現に今回の我々は、終始他隊を圧倒するスピード、粘りを見せることができ、カザフスタンのナショナルチームと比べても遜色なく行動できた。おかげで彼らからも一目置かれ、大いに友好を深めることができた。大学山岳部の伝統と明大スピリットを存分に出せ、我々がこれまでやってきたことは間違いではなかったと、今回の登山を通じて確信した。隊員達には、今回の経験をステップにして、今後はさらに自分自身の目標に向かってくれればと感じている。